

各位

2024年4月26日

総合編成局 マーケティング・PR部

MBS テレビ

『映像'24 労組と弾圧～関西生コン事件を考える～』

『情熱大陸 小島よしお』

『映像'24 記者たち～多数になびく社会のなかで～』

日本の放送文化の質的な向上を願い、優秀な番組・個人・団体を顕彰する「ギャラクシー賞」テレビ部門下期において、MBSのテレビ番組1作品が「入賞」、2作品が「奨励賞」、となりましたのでご報告いたします。

<入賞>

『映像'24 労組と弾圧～関西生コン事件を考える～』

2024年3月31日（日）放送

プロデューサー：橋本 佐与子（報道情報局番組センター）

ディレクター：伊佐治 整（報道情報局番組センター）

番組内容

「これは放っといてもいいか」、ニュースを追う日々で反射的に前捌きしてしまうネタがある。自殺、市民オンブズの小さな告発・・・大事な問題を孕んでいるかもしれないのに、人や時間が限られることを言い訳に葬る。「関生事件」もそうした一つだった。

「連帯ユニオン関西生コン支部、通称“関生”」はミキサー車運転手による労働組合だ。粘り強い交渉やストライキも辞さない姿勢から経営側にとって厳しい労組として知られた。その関生の組合員が威力業務妨害や恐喝容疑で次々と逮捕された。団体交渉やストライキなど労組にすれば当然の行動ばかりだった。のべ81人が逮捕され長期勾留された。しかし、この「関生事件」を報道するメディアは少なかった。

警察・検察の取り調べで保釈と引き換えに迫られた「組合脱退」に応じ罪を認めた者も多かった。しかし、否認・黙秘を貫いた組合員たちに無罪判決が出るように。起

訴された組合員のべ32人のうち11人の無罪が確定。ただこれらを報じたメディアも僅かだった。

「どうせ過激な行動をとったんだろう」「反社会的勢力とつながっているのでは」だから「逮捕されても仕方ない」、こうして私たちは「関生事件」を黙殺してきた。

非正規雇用、物価高など、労働者の環境は改善されない。一方、全米自動車労組がストで大幅賃金アップを勝ち取ったり、日本でも百貨店がストにより休業したり労組の存在が再評価されている。関生は労組としてやるべきことをやっただけではないか。遅まきながら考え直す。「関生事件」とは何だったのか。労働組合の意義とは？



## < 奨励賞 >

### 『情熱大陸 小島よしお』

2024年1月21日（日）放送

プロデューサー：沖 倫太郎（制作局東京制作部）

#### 番組内容

「お笑いの才能は本当はない。ネタづくりも大喜利も能力は本当に低い」

43歳になった小島よしおは、自らそう言い切る。

17年前、海パン一つで放つギャグ「そんなの関係ねえ！」で、一世を風靡。流行語にもなった。しかし、その後待っていたのは、人気の急落。

“一発屋”として消えていく運命——。誰もがそう感じていた。

だが我々が取材で目の当たりにしたのは、熱狂の渦の中で「そんなの関係ねえ！」  
「はい！おっぱっぴー」を連呼する小島の姿だった。

おなじみのギャグを一緒になって叫ぶのは、子どもたちとその親世代。「元気がもら  
える」と口にするお客の中には、目に涙を浮かべる者も・・・。

ショッピングモールなどを中心とした「子ども向けライブ」は年間 100 本余り。テレ  
ビ画面に映らないところで小島は、全国各地から引っ張りだこなのだ。

小島はなぜ今、愛されるのか？

密着中、能登半島で大地震が発生した。小島のスケジュールには1週間後、石川・小  
松市での仕事が入っている。果たして行くべきなのか。

葛藤を抱えたまま、現地に向かった小島を待っていたものとは一。



## < 奨励賞 >

### 『映像'24 記者たち ～多数になびく社会のなかで～』

2024年3月3日（日）放送

プロデューサー：橋本 佐与子（報道情報局番組センター）

ディレクター：齊加 尚代（報道情報局番組センター）

#### 番組内容

新聞もニュースも、なくなる日が近づいているのだろうか。過酷な現実は見たくない。エンタメに心地よく浸っていたい。日本の新聞の発行部数は、20年前の半分近くに激減した。

社会の成熟度は、腐敗する権力を適切にチェックできるかどうか、よりマシな方向へ修正できるかにかかっている。だが、主権者である国民の判断を左右するニュースは弱っている。

PV数など過剰な数字主義に走って、ニュースを「コンテンツ」扱いする。取材に時間をかけた調査報道より、炎上狙いのお手軽なコンテンツがネット言論で大量拡散される。記者たちを軽蔑し、叩く声がSNSに溢れる。言葉が軽く飛び交う社会でマイノリティーたちには差別が襲いかかる。

こうしたなか、思いを託される記者たちがいる。隠される情報を掘り起こし、理不尽なことに真正面から闘って記者本来の仕事から撤退しない人たちだ。

「自分のなかで客観報道や表現の自由ってことは、ぜんぶ方便だったわけですよ。さぼってきた自分というのを忘れずにいたい」（神奈川新聞 石橋学）

「苦しんでいる人たちをほっておくことは、自分たちの首を絞めていると言いたい」（元毎日新聞 小山美砂）

「（本土の多くの人は）沖縄を苦しめていることに自覚すらない。深い断絶を感じる」（琉球新報 明真南斗）

ジャーナリズムとは何なのか。それぞれの記者たちの姿から伝えたい。この時代にこそ、忘れてはならないその軸と土台を。この多数になびく社会のなかで。



本件お問い合わせ：総合編成局 マーケティング・PR 部